

ランナー

群
青

老いたマラソンランナーが、ぼくを身近において語っていた。
走り続けることと、コスモスが風に揺れることについてだった。
一緒かな、どちらも。

花が揺れている。

風になって駆けている。

おなじなんだ。

そして、ぼくは男なんだ。

女から存分に女を吸い取った男。

ぼくの息で揺れるコスモス。

どのくらい走っただろう、と思うとき、

男は男になり、風になっている。

九十歳を超えたところで去っていったランナー。
風が吹いていて、コスモスが揺れている。

黒いオーロラ

緩やかな性のおいにみちて、
黒いオーロラが夜を揺らしはじめた。
酔い潰れたオリオンも、見張り役をやめられないアルデバランも、
熱湯をぶっかけても呻きひとつあげなかつた頑固なアンタレスも、
地球の最後を知つているとでもいいたげなシリウスも、
赤子のように両手を握り締めて、眠りについでいる。
黒いオーロラは、飢えと怒り、悲しみに波立つ砂漠も、
傷ついた遙かな黎明の森も揺らしながら、
ぼくらの一日の労働のほとぼりを夢の襪に包んでいく。
ぼくらの皮膚を刃を跳ね返す戦いの衣に変えていく。
朝に向かつてぼくらの五感がひらかれていく。
銀色の穂の広がるすすきの野の向こうに、なだらかな低い山並みが
みえる。
裾野にひしめく建物から聞こえてくるものは音楽なのか祈りなのか
人声なのか。
海の近くの町でへしゃげた炉が煙をあげている。
仲間たちが集まってくる。

声にはならないが喜びで胸がふくらんでいる。
ストライキだ。

黒いオーロラが満足げに肯く。
黒いオーロラは知っている。

朝霧をついて立ち上がるぼくらのこと、
工場にも鉄道にもあふれるぼくらのこと、

ぼくらの体をめぐる血のこと、
黒いオーロラが消えたあとの朝、ぼくらがさらに堂々としているこ
となど、

あちこちに広げられた褥で泣き声をあげる無数の子供たちや、
崩れかけた壁土を丁寧塗りに塗り直す老人やら、

怒りと希望の静かな渦巻、

すべてを、
分かっているよと、黒いオーロラが肯く。

蛇

二ヶ月前、ぼくの顔を見ることもなく、写し出された肺の断層写真の一部をポールペンの先で示し、これが癌です、大きな病院に行つて精密な検査をしてもらい、今後の指導を受けてください、と白衣のなで肩の若い医者が、言い放つた。

鼻水が止まらず軽い咳が続いていたので、行きつけの顔見知りの医者のところに行つたのだが、その日は、初めて見る代理の男の医者がいて、彼にとつても初めてあるはずの患者であるぼくに、平然と、見事に平然と、そう宣告した。

それから間もなく、音もなく、夕暮れ近くの薄暗い、ぼくの部屋に入つてきたものがあつた。

書斎のドアが開かれ、近づいてくる衣擦れの音がして、振り返ると、細長い蛇のようなものが鎌首をもたげてぼくを見上げていた。

胴体は透明で水のように、そいつはしきりに、芥子粒くらいの目でぼくに何かを催促していた。

やがて、蛇はガラスのような透明の皮を脱いだ。すると一筋の水となつて机の裏側に流れていった。あとには、ざらざらとした、碎かれたレンガのような、くすんだ赤い粉が残っていた。

あたりの空気がじりじりと張り詰め、圧力をかけてきた。その時、はじめで、呼吸がしにくいと思つた。

大気は明るくきらきらとしていて、硬い。吐き出そうとする息を押しもどす。悲鳴をあげようにも、肺は膨れていく。

少しの間だけ、圧力がふつと解ける時があり、たまつた空気をなんとも快く吐き出し、ああ、生きていけると安堵するが、すぐに息が押し返されてくる。

そのうち、気が遠のく。

取り巻く空気は、意志を持って、ぼくの全身を虜にし、その意のままに息を封じ込める。

やつとの思いで葉を取り出す。水なしで呑み込む。

数分たつと、だれのものかはわからぬ思いがぼくのなかに生まれ、ぼくがぼくでなくなっていくかのような気分になつて行く。

逃げ出さねば。もつと広いところで自由な呼吸がしたい。

痛む両の目に光が飛び込んできた。

光は蛇だつた。

蛇は、ついてくるように、ぼくを促していた。

早晩、大気の圧力に肺が潰されてしまうぞ、葉の泥の中で、萎れきつてしまうぞ、一緒に来い。

しかし、ついて行つてどうなるのか。

砂の山をいくつか越える。

海が広がる。

風が風車を回している。

ああ、あの洞窟か。
無数の小石が鳴る。

小石が唸る。
喋る小石たち。

ひとつの小石にひとつの表情があらわれる。

いつかどこかで出会ったひとたち。

補陀落まいりの浜の石、海を見たつてしようがない。

親しかった母も含めた何人かの女たちが立ち現れ、

蛇が涼しい顔でぼくの表皮をすすると剥ぎ終わると、
洞窟の奥に消えた。

初めての自由を味わっているんだな、ぼくは。

女たちが洞窟に誘う。

ああこれだ。

ぼくは呟く。

納得している。

笑みさえこぼれる。

ぼくの目の前にはぐちゃぐちゃと音を立てて頭を少しづつ見せ、今に

も生まれ出ようとするとする子供がいた。

きつちり女の筋肉に包まれ暖かい血にまみれて、今にも空気を吸い込

もうとする子供がいるのだった。

ああ、もうじゅうぶんだ。